

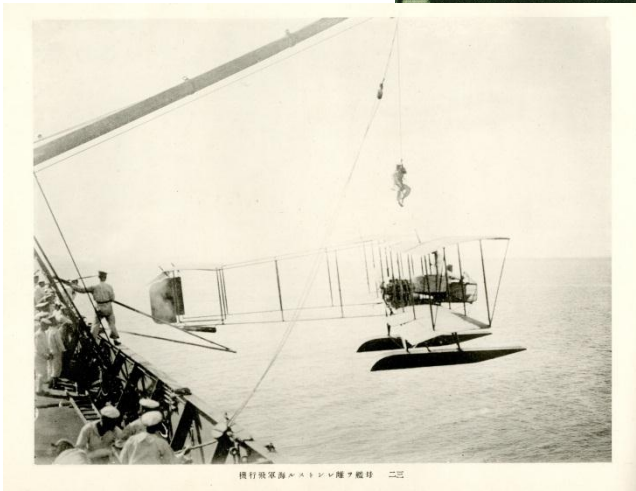


「青島要塞戦ニ於ケル我射弾ノ効力調査報告附属写真帖」

第一次世界大戦勃発直後の大正3 (1914) 年8月23日、日本はドイツに宣戦を布告、独立第18師団 (神尾光臣中将) をもって、山東半島にあるドイツ租借地の青島を攻撃した。当時ドイツ軍は青島を要塞化し、約5000名の兵士と122門の重軽砲を配備していた。9月2日、山東半島北岸に上陸を開始した独立第18師団 (総員約5万名) は、青島に向って南進、約1か月の攻撃準備後、英軍約1個大隊 (総員約1300名) とともに10月31日攻撃を開始、11月7日同地を占領した。この攻撃で日本軍は、新砲種を含む138門の重軽砲の他、試作段階の高射角野砲や迫撃砲なども投入した。

史料は、大正3年11月11日、青島要塞戦における日本軍の弾丸効力の調査を命じられた砲兵中佐千葉三吉と砲兵大尉永持源次が、翌4年3月20日に陸軍大臣岡市之助中将に報告した「青島要塞戦ニ於ケル我射弾ノ効力調査報告」の「附属写真帖」で、破壊されたドイツ軍の砲台や要塞砲などの写真が多数収録されている (登録番号: 戦役-写真-60、防衛研究所戦史研究センター史料室蔵)。

青島方面寫真帖



「青島方面写真帖」

第一次世界大戦において飛行機が新しい兵器として脚光を浴びた。日本海軍においても大正3(1914)年8月18日、母艦「若宮丸」とファルマン式水上機4機(複葉、70馬力3機、100馬力1機)を主力とする海軍航空隊が編成された。「若宮丸」は、わが国が第一次世界大戦に参戦した8月23日に航空機用運送艦としての設備を完成した。「若宮丸」は第二艦隊に属し、飛行士及び整備兵計52名を乗り組ませ、青島に出撃した。「若宮丸」においては、水上機がデリックで揚げ下ろしされた。海軍航空の先駆けともいふべき榮譽を担った「若宮丸」だったが、9月30日に触雷損傷し、修理のため飛行機と要員を基地に置き、内地に帰還した(登録番号：⑪日独 T3-14「大正三年 若宮丸戦時日誌」、戦史研究センター史料室所蔵)。

史料は第二艦隊の行動に関する写真を多数収めた「青島方面写真帖」で、その中でここで特に紹介する写真は、まさに艦上から水上機が下ろされようとしている場面である(登録番号：⑧写真181、戦史研究センター史料室所蔵)。